

【アーティストサポート】を通して、アーティストたちの活動をご支援いただき、ありがとうございます。
時や国を超え「生きる力」を与えてくれる文化・芸術に、引き続きのご支援をお願い申し上げます。

ご支援をいただいた個人ならびに企業・団体の皆さま

<2023年度年間サポート>

F.A Y.A T.I 今井良成 S.U 植原由起子 S.U M.E A.O K.O S.O 河村はるみ K.K
木村美明 M.K 小室秀夫 新貝康司 N.S M.S 関根一祿 A.D 土屋涼子 トゥルーラブ真智子
トゥルーラブ真凜 N.N 中島和 中野和枝 中村尚義 中村美穂 T.H M.H 平山美由紀 藤野盾臣
細沼康子 M.H 松尾芳樹 松田 香 真野美千代 三橋祐太 J.M H.M S.Y 渡部伸子
TDK株式会社 MEDIHEAL & SEKIDO コンツェルトハウス・ジャパン by 株式会社キタマ
株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント 株式会社ロジックアンドエモーション
ライフプラン株式会社 Heart of the Earth株式会社
ナレッジワーカーズインスティテュート株式会社 株式会社RINABO きづきアセット株式会社
株式会社青林堂 日本パデレフスキ協会淡路
(匿名希望 22名)

<舘野泉バースデープロジェクト>

Y.A 阿部将任・登美子 新井京子 池田光世 一柳吉子 A.I 遠藤一秀 大嶋早苗 大嶋浩美
大谷恵美子 S.O 奥田三華 小畑裕子 木全恵美子 久保春代 M.K 黒川智恵美 黒住彰子
斉藤久子 坂井和 佐々木暁子 菅原佳世子 鈴木早苗 R.T 田口雅子 田邊英利子 土谷美保子
永作稔 中村恭子 中村康江 K.H 羽生賢次 林雄嗣・鈴子 福島晶子 堀田高秀 松田純子
三上美智恵 光永育 K.M 山家七恵 S.Y K.Y 吉岡玲子 吉田和充・淳子
舘野泉ファンクラブ東京 舘野泉ファンクラブ東北 タビオラの会 日本セヴラック協会 有限会社ムジカーザ
NPO法人 Mプロジェクト スオミ・ピアノ・スクール研究会
(匿名希望 19名)

<ショパン・ピリオド楽器プロジェクト>

S.O トゥルーラブ真智子
(匿名希望 3名)

<ニュークラシックプロジェクト>

浅岡尚子 岩井陸雄 上原啓子 小田島容子 K.K 久保千聖 雲然祥子 小池美喜 篠崎啓史 I.S T.S
トゥルーラブ真智子 トゥルーラブ真凜 T.N 長谷部 宏行 秦勝重 T.H 林 路郎 細沼康子 牧野佳那
松下泰之(マティビ) S.Y
(匿名希望 14名)

2023年11月15日現在 敬称略/匿名希望の方は記載しておりません



ご支援についての詳しい内容は、どうぞ下記へお問い合わせください。

株式会社ジャパン・アーツ アーティストサポート係 Tel.03-3499-7720

(平日11:00~17:00 年末年始を除く)

アーティストサポートの
詳細はこちらを
ご覧ください。



ベルリン・フィル
八重奏団
PHILHARMONIC OCTET BERLIN

2023年11月27日(月) 19:00開演
東京オペラシティ コンサートホール

7:00p.m., Monday, November 27, 2023 at Tokyo Opera City Concert Hall

主催：ジャパン・アーツ

協賛：

後援：ドイツ連邦共和国大使館  協力：ウイステリアプロジェクト



©Simon Pauly (excluding Kyoungmin Park)

PROGRAM

シューベルト：楽興の時 Op.94 D780 [ハンス・アブラハムセンによる八重奏編曲版]

F. Schubert: Moments Musicaux Op.94 D780 (arranged for octet by Hans Abrahamsen)

- | | |
|------------------|-------------------------|
| 第1曲：モデラート | No.1 : Moderato |
| 第2曲：アンダンティーノ | No.2 : Andantino |
| 第3曲：アレグロ・モデラート | No.3 : Allegro moderato |
| 第4曲：モデラート | No.4 : Moderato |
| 第5曲：アレグロ・ヴィヴァーチェ | No.5 : vivace |
| 第6曲：アレグレット | No.6 : Allegretto |

細川俊夫：《テクスチュア》八重奏のための (日本初演)

Toshio Hosokawa: Texture for Octet (Japan premiere)

※ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団財団とジャパン・アーツによるベルリン・フィル八重奏団のための委嘱作品

* * * * *

シューベルト：八重奏曲 へ長調 Op.166 D803

F. Schubert: Octet in F major, Op.166 D803

- | | |
|---|---|
| 第1楽章：アダージョ — アレグロ | 1st Mov.: Adagio - Allegro |
| 第2楽章：アダージョ | 2nd Mov.: Adagio |
| 第3楽章：アレグロ・ヴィヴァーチェ | 3rd Mov.: Allegro vivace |
| 第4楽章：アンダンテ | 4th Mov.: Andante |
| 第5楽章：メヌエット、アレグレット | 5th Mov.: Menuetto, Allegretto |
| 第6楽章：フィナーレ、アンダンテ・モルト — アレグロ — アンダンテ・モルト | 6th Mov.: Finare, Andante molto - Allegro - Andante molto |

ベルリン・フィル八重奏団 2023年日本公演スケジュール

11月27日(月)	東京	東京オペラシティ コンサートホール	主催:ジャパン・アーツ
11月28日(火)	福島	ふくしん夢の音楽堂(福島市音楽堂)大ホール	主催:ふくしん夢の音楽堂[(公財)福島市振興公社]・福島市
11月30日(木)	堺	フェニーチェ堺 大ホール	主催:フェニーチェ堺[(公財)堺市文化振興財団]
12月1日(金)	津	三重県文化会館 大ホール	主催:三重県文化会館
12月2日(土)	川崎	ミューザ川崎 シンフォニーホール	主催:神奈川芸術協会

ベルリン・フィル八重奏団

Philharmonic Octet Berlin

ベルリン・フィル八重奏団は、結成から80年以上というベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバーが組織する多くの室内楽アンサンブルの中で、もっとも長い歴史と伝統をもつ団体のひとつである。

その歴史は、1928年、8人の楽員たちがシューベルトの八重奏曲を演奏するために集まったところから始まった。メンバーは現在に至るまで、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のトップ奏者および世界第一級の演奏家によって構成されており、ヨーロッパをはじめ、世界の諸都市で演奏活動を行っている。当初はヨーロッパを中心に活動していたが、1954年、初めて7週間の南米ツアーを行い、この頃から始まったアメリカ合衆国、カナダへの再三にわたる演奏旅行で成功をおさめた。その後、アフリカ、韓国、中国、マレーシア、ニュージーランド、オーストラリア、旧ソ連、イスラエルなどの各国や、ザルツブルク、ルツェルン、エディンバラ、ベルリンなどの国際音楽祭にも度々招かれ、日本には1957年の初来日以後、定期的に来日している。また1982年には、ベルリン・フィルの創立100周年記念演奏会にも参加した。レパートリーは、ウィーン古典派からロマン派の音楽を中心に幅広く、この編成ならではの編曲作品も含まれている。また1958年、ヒンデミットがこの八重奏団のために八重奏曲を作曲し、自らヴィオラを担当して歴史的初演を行ったのはじめ、細川俊夫、ヘンツェ、ブラッハー、テーリヒェン、シュトックハウゼン、イサン・ユンなどの著名現代作曲家が、彼らのために作品を残している。



檜本大進 (第1ヴァイオリン)

Daishin Kashimoto (1st Violin)

1996年のフリッツ・クライスラー、ロン＝ティボーでの1位ほか、5つの権威ある国際コンクールにて優勝。2010年ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の第1コンサートマスターに就任。

室内楽の分野でも積極的な活動を行い、ギドン・クレーメル、ユーリ・バシメット、堤剛、エマニュエル・パユなど世界有数のソリストと共演し、2007年より赤穂国際音楽祭、2008年より姫路国際音楽祭の音楽監督を務める。

使用楽器は、株式会社クリスコ(志村晶代表取締役)から貸与された1744年製デル・ジェス「ド・ベリオ」。



ロマーノ・トマシーニ (第2ヴァイオリン)

Romano Tommasini (2nd Violin)

イタリア人の両親のもと、ルクセンブルクとフランスで育った。パリで音楽教育を受け、1983年に修了。ナンシー管弦楽団の第1コンサートマスターを務めた後、1989年にベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の一員となった。

室内楽においては、これまでにベルリン・フィル弦楽三重奏団、ベルリン・フィル弦楽五重奏団、ベルリン・フィル・カメラータのメンバーとしても活躍している。



パク・キョンミン (ヴィオラ)

Kyoungmin Park (Viola)

韓国生まれ。2003年からウィーンに留学し、2008年からベルリンのハンス・アイスラー音楽大学にてヴァルター・キュスナーに師事。2010年よりタベア・ツィンマーマンの下で研鑽を積む。ライオネル・ターティス国際ヴィオラ・コンクール第2位、ミュンヘン国際音楽コンクール(ヴィオラ部門)第2位及び聴衆賞を受賞。使用楽器は1690年製のルドルフ・ヘス(Rudolf Höß)製作によるヴィオラを使用。2018年よりベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバー。

※本ツアーでは、アミハイ・グロスに代わり、パク・キョンミンがヴィオラ奏者を務めます。

PROFILE



クリストフ・イゲルブリンク (チェロ)

Christoph Igelbrink (Cello)

デュッセルドルフ生まれ。デュッセルドルフのロベルト・シューマン大学、ハンブルク音楽大学で学び、1986年にハンブルク国立歌劇場に入団。1989年よりベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のメンバーとなった。

ベルリン・フィル12人のチェリストたち、フィルハーモニー・ピアノ三重奏団ベルリンのメンバーとしても活動している。



エスコ・ライネ (コントラバス)

Esko Laine (Contrabass)

ヘルシンキ生まれ。13歳でコントラバスを弾き始め、ヒュビンカー音楽院、フランクフルト音楽大学、ジュネーヴ音楽院で学ぶ。ミュンヘンのARD国際コンクール、マルクノイキルヒェンの国際器楽コンクール入賞。18歳でフィンランド国立歌劇場管弦楽団のメンバーとなった。1986年以来、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席コントラバス奏者を務める。彼のために作曲されたコントラバスのための協奏曲と室内楽曲がいくつかあり、これらの初演を行っている。



ヴェンツェル・フックス (クラリネット)

Wenzel Fuchs (Clarinet)

オーストリアのインスブルックに生まれ、ウィーン音楽大学でペーター・シュミードルに師事。ウィーン・フォルクスオーパーの首席奏者、オーストリア放送(ORF)交響楽団の首席奏者を歴任し、1993年にベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席クラリネット奏者に就任。

ソリスト及び室内楽奏者としても活躍しており、ベルリン・フィル管楽アンサンブル、ベルリン・フィル木管ソロイスト、フィルハーモニック・フレンズ・オブ・ウィーン=ベルリン等で演奏している。

PROFILE



シュテファン・ドール (ホルン)

Stefan Dohr (Horn)

ミュンスター生まれ。エッセンとケルンで学び、フランクフルト歌劇場管弦楽団、ニース・フィルハーモニー管弦楽団、ベルリン・ドイツ交響楽団の首席ホルン奏者を経て、1993年ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席ホルン奏者となる。

現代の作曲家の作品にも積極的に取り組み、ヘルベルト・ヴィリの協奏曲「モンタフォン」、細川俊夫の「開花の時」、ヴォルフガング・リームに献呈された協奏曲など、彼に捧げられた多くのホルン協奏曲の初演を行なっている。



シュテファン・シュヴァイゲルト (ファゴット)

Stefan Schweigert (Fagott)

1985年からベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の首席ファゴット奏者を務める。これまでにシャルーン・アンサンブル・ベルリンのメンバーとしても活動、ヨーロッパ室内管弦楽団やギドン・クレーメル主宰のロッケンハウス音楽祭への音楽祭などにも多数出演。1987年以降はベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のカラヤン・アカデミーで教鞭を執る。

PROGRAM NOTES

シューベルト：楽興の時 Op.94 D780 [ハンス・アブラハムセンによる八重奏編曲版]

《楽興の時》という美しいタイトルをもつこの小品集は、短命だったシューベルトの最後の5年間に作曲されている。ベートーヴェンの有名な《6つのバガテル》作品126と同じ年に書き始められ、どちらもロマン派の作曲家が好んで書いた性格小品の先駆けとなった。2分から6分ぐらいまでのささやかな時間の中で、ときに夢想的で、ときに激しく、即興的で詩情豊かな音楽が紡がれる。

今回はこの小品集をハンス・アブラハムセンによる八重奏曲版で聴く。アブラハムセンは歌曲集《レット・ミー・テル・ユー》(2013)やオペラ《雪の女王》(2019)で知られるデンマークの作曲家。彼は昔、趣味でピアノをたしなむ父親が《楽興の時》をよく弾いたことを覚えていた。2018年、ある演奏会でこの曲を聴いたアブラハムセンは、初期に自分がホルン奏者として活動していた頃、シューベルトの八重奏曲をたびたび演奏したことを思い出したという。ちょうどシュテファン・ドールをソリストとするホルン協奏曲を作曲中で、ホルンが活躍するシューベルトの八重奏曲の書法がヒントになった。協奏曲の第1楽章を書き終えた後、気分転換をかねて、《楽興の時》を八重奏版に編曲するアイデアを実現したのである。

あくまで「シューベルトだったら」という範囲での編曲で、メロディや和声は原曲のまま、ホルンは当時のヴァルブのないホルンで演奏する想定だ(現代のホルンでも演奏可)。第1曲モデラートは跳躍音程を含む澁澗とした主題による主部と属調による穏やかな中間部からなる。第2曲アンダンティーノは変イ長調の主部に嬰へ短調のエピソードが入って、長調と短調の間を揺れ動く。2回目のエピソードで激情が噴出。第3曲アレグロ・モデラートは低音域でリズムを刻む音型にのせて、「ロシア風歌曲」と呼ばれる独特の楽想が奏でられる。第4曲モデラートは無窮動風の分散和音から浮かび上がるメロディを、管楽器が強調する。全員で勇ましい楽想を奏でる第5曲アレグロ・ヴィヴァーチェはマーチ風。第6曲アレグレットは問いかけるようなフレーズが続く優しい音楽。転調が多い。

(白石美雪 [音楽学・音楽評論])

細川俊夫：《テクスチュア》八重奏のための

この作品は、ベルリン・フィル八重奏団の委嘱作品として2020年に作曲し、初演者の彼らに捧げた。

私は数年前から、音楽作品を「歌」を織り込んでいく織物(テクスチュア)と考えて創作を続けている。「歌」とは旋律(メロディー)のことであり、一つの旋律には、常に中心音があり、その中心音の周りに多くの装飾音がある。その旋律は、東洋の毛筆による書(カリグラフィー)のような伸びやかな形態を持つ。あるいはその旋律線の内部には、植物の蔦や枝のように命が宿って

いて、それが自由にどこまでも伸びていく。それに対する旋律を作り、その二つが東洋の陰陽のように、男性原理・女性原理、静と動、光と影、強弱、高低が対立することなく結びあう関係を持たせる。その関係を、少しずつ膨らませ、3声、4声と織り成していく。西洋音楽の対位法とは異なった、陰陽の音宇宙を持った生成法による音のテクスチュア。イスラム文化でのアラベスク模様は、砂漠の内に生まれる植物が生み出すオアシス、楽園への憧れを意味しているという。

弦楽四重奏とクラリネット、バスーン、ホルン、コントラバスの2群に楽器編成を分割させ、その二つが融合、対立し、少しずつ音楽は協和的な世界に向かっていく。

(細川俊夫 [作曲家])

シューベルト：八重奏曲 へ長調 Op.166 D803

《楽興の時》を書き始めた頃、シューベルトは精神的な苦悩をかかえていた。メッテルニヒのウィーン体制による自由主義の抑圧への嘆きが彼の残した日記等から伝わってくる。親しい友との別離、梅毒の発症といった個人的な事情も憂鬱な気分をもたらしていた。

シューベルトが次々と室内楽を書き、「大交響曲」への道を探ったのは、ちょうど《楽興の時》に着手した翌年のことである。「ロザムンデ」、「死と乙女」の愛称をもつ弦楽四重奏曲第13番と第14番は当時のシューベルトの悲哀を感じさせるのだが、同年2月に着手して、3月1日に完成されたへ長調の八重奏曲は晴朗な気分が支配している。多くの苦難の中で音楽を作る喜びをかみしめているかのようだ。

クラリネット、ファゴット、ホルン、ヴァイオリン2、ヴィオラ、チェロ、コントラバスという、シューベルトの室内楽としては最も大きい編成で、管楽器と弦楽器のバランスがとれたアンサンブルになっている。クラリネットを好んで吹いたフェルディナント・トロイヤー伯爵の依頼で、ベートーヴェンの《七重奏曲》と対になるような曲を求められた。ヴァイオリンを1挺、加えたのはより交響的な響きにしたいと考えたからだろう。

演奏は約1時間。全体の4分の1を占める第1楽章はアダージョの序奏とアレグロの主部からなる。第1主題は自作の歌曲「さすらい人」のピアノ伴奏の音型に類似。2つの緩徐楽章(第2楽章アダージョ、第4楽章アンダンテと変奏)の前後にスケルツォ(第3楽章アレグロ・ヴィヴァーチェ)とメヌエット(第5楽章アレグレット)を置き、2つ目の緩徐楽章(第4楽章)を変奏形式にしたのはベートーヴェンの七重奏曲と同じ。深刻な気分の序奏で始まるフィナーレ(アンダンテ・モルト — アレグロ — アンダンテ・モルト)はヴィルトゥオーゾ風の演奏至難なパッセージを含む。シンフォニックな広がりを見せ、フィナーレを聴き終わった時、これこそシューベルトならではの光と影の絶妙な均衡だと得心するのである。

(白石美雪 [音楽学・音楽評論])